

# 定時制高校生の社会性習得度チェックリストの開発②

—高校生と担任教員の社会性習得度評定の比較—

○土居正城 若林上総 戸賀沢亮子 佐野和規 加藤哲文

(長野県飯田養護学校) (国立特別支援教育総合研究所) (埼玉県立川越工業高等学校) (山梨県立教育センター) (上越教育大学)

KEY WORDS: 定時制高校 社会性 チェックリスト

## (問題と目的)

定時制高校には、特別支援教育を要する生徒がより多く在籍している(特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議高等学校ワーキング・グループ, 2009)。彼らの卒業後の社会的・職業的自立に向けて、モデル校ではソーシャルスキルトレーニング、社会人としての生活、自己理解、環境調整、援助要請といった内容が、指導で取り上げられている(文部科学省, 2012, 2013, 2014)。今後は、これらの取組で扱われる内容が整理され、定時制高等学校特有のニーズを踏まえた、実証的な指導の計画、実施、評価が行われることが期待される。

特に、指導が実効性を伴うためには、通級による指導を受ける生徒自身が、自らの学習内容について教員と共に考えるという立場に立つ必要性が指摘されている(高等学校における特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議, 2016)。そのため、指導では、生徒自身が主体的に取り組む契機となるよう、生徒との対話を重視し、生徒が自分の課題、つまり、具体化された学習課題を認識し、自覚できるようにし、取組を評価する場面では自己評価を取り入れた実践が行われている(文部科学省, 2017)。

この様な状況を踏まえ、本研究では、教員が行う評価との比較を通じ、生徒自身の自己評価の特徴を検討する目的で質問紙調査を行った。

## (方法)

20XX年4月から7月に、東北、関東、甲信越地域にある定時制高校に研究協力を打診し、研究協力の了承を得た8校には7月～9月に質問紙を配付した。

質問紙は、定時制高校生の社会誠意習得度チェックリスト(以下、チェックリスト; 若林・土居・戸賀沢・佐野・加藤, 2017)を用いた。チェックリストは、「職業適性」、「基本的労働習慣」「対人スキル」、「日常生活管理」、「心と健康の管理」といった5つのカテゴリで構成されており、回答者となった生徒及び担任教員は、カテゴリごとに記述された項目を読み、その習得度について、「十分備わっている」「備わっている」「あまり備わっていない」「まったく備わっていない」の4件法で回答することとなった。

チェックリストには生徒とその担任教員に別々に回答を求め、両者の回答に対応がつくように生徒の属性(学校名、学年、出席番号)についても回答を求めた。

倫理的な配慮から、得られた回答は本研究以外の目的では使用しないこと、個人情報特定される形での発表はしないこと、回答後であっても申し出ればいつでも研究協力をやめられることなどが伝えられ、承諾した生徒及び教員が研究に協力した。

## (結果)

235名の生徒及びその担任教員から回答を収集した。そこから、欠損のある回答を除いた159名の生徒とその担任教員の回答を分析に用いた。

まず、各カテゴリにおける信頼性分析を行った。自己(生徒)評定および他者(担任教員)評定において、一定の内

的整合性( $\alpha$ 係数)が得られた(自己評定: .64-.93、他者評定: .77-.96)。他者評定の方が自己評定よりやや内的整合性が高い傾向が見られた。

つぎに各カテゴリの両者の評定における相関分析を行った(Table1)。その結果、全てのカテゴリにおいて両者の評定には一定の相関( $r=.36-.47, p<.001$ )がみられた。

Table 1 カテゴリにおける生徒評定と担任教員評定の相関 (N=159)

カテゴリ	職業適性	基本的労働習慣	対人スキル	日常生活管理	心と健康の管理
相関係数	.36***	.41***	.46***	.47***	.40***

相関係数は Pearson の積率相関係数 \*\*\*:  $p<.001$

さらに各カテゴリにおける両回答者の平均及び標準偏差を算出した(Table2)。領域(5つのカテゴリ)と回答者(生徒と担任教師)を要因とする2要因の分散分析の結果、領域の主効果のみが有意であり( $F(4,632)=8.37, p<.01$ )、Holm法による多重比較の結果( $MSE=.093, p<.05$ )、「職業適性」「基本的労働習慣」が「対人スキル」「日常生活管理」「心と健康の管理」より有意に大きかった。

Table 2 カテゴリの平均及び標準偏差 (N=159)

カテゴリ	生徒		担任教員	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
職業適性	2.82	.54	2.72	.56
基本的労働習慣	2.82	.50	2.76	.59
対人スキル	2.73	.51	2.65	.55
日常生活管理	2.71	.54	2.68	.57
心と健康の管理	2.68	.55	2.69	.57

## (考察)

まず、生徒評定と担任教員評定の相関分析において一定の相関がみられたことや、分散分析において領域の主効果のみが有意であったことから、生徒の自己評定に一定の信頼性が認められたと考えられ、本チェックリストを生徒自身が評価することへの一定の根拠が見出されたといえよう。

つぎに、担任教員、生徒ともに、将来の社会生活に必要なスキル(「職業適性」「基本的労働習慣」)については習得状況を実際の学校生活で直面するスキル(「対人スキル」「日常生活管理」「心と健康の管理」)よりも高く見積もる傾向がみられた。将来の社会生活に必要なスキルの習得状況を高く見積もるのは、希望的観測や、学年の進行とともに得られる学校での経験なども考えられるが、アルバイト等の社会経験がある生徒はより現実的な見積もりを得られており、社会経験の多少は、職業適性や基本的労働習慣の形成と関連する可能性もある。これについては、教員のデータ、生徒のデータを個別に取り扱うことでより詳細な分析を行うことで明らかになるであろう。

一方、実際の学校生活で直面するスキルの見積もりを高めるためには、対人スキルの指導プログラムの開発などが必要かつ効果を伴うと考えられる(若林他, 2017)。

(DOI Masaki, WAKABAYASHI Kazusa, TOGASAWA Ryoko, SANOKazunori, KATO Tetsubumi)